

現代ドイツにおけるネオナチ・ユーゲントの文化（4）

増 井 三 夫*

（平成9年11月13日受理）

要 旨

ネオナチ・ユーゲントの行動は1992年8月にロストック、11月にメルン、1993年5月にゾーリンゲンで、トルコ人住宅放火襲撃へとエスカレートした。その衝撃は、直ちに世界に打電されたが、ドイツでは一般市民は勿論ドイツ在住トルコ人の日常性の真っ只中に走った。犯人の一人（16歳）はその精神的ヒストリーの中でネオナチズムへの同一化をはたしていた。

KEY WORDS

ネオナチズム Neonazismus

ネオナチ・ユーゲント Neonazi-Jugend

はじめに

1. ネオナチ・ユーゲント文化「解釈」の可能性
2. 転換期前後の若者の日常生活世界
 - (1) アイデンティティ「危機」・方向性「喪失」
 - (2) 崩壊が進む家庭生活
 - (3) 学校内暴力の日常性
 - (4) 価値多元主義にたいする不適応
(以上 第15巻第1号)
 - (5) 「最高の価値」の実行
 - (6) 強力な世界観への志向
(以上『西洋教育史研究』第24号)
3. ネオナチの組織と行動
 - (1) ネオナチ組織の概観
 - (2) 指導原理
 - (3) 東ベルリンのネオナチ組織
 - (4) ヴァイトリング通り122番地
 - (5) ドレスデンのネオナチ殉教者追悼行進
 - (6) ネオナチ組織周辺の若者
 - (7) ネオナチ事件簿
- (8) 「犯人は単独」か
(以上第15巻第2号)
4. ネオナチ・ユーゲントの日常性
 - (1) ロストック放火事件
 - (2) メルン放火事件
 - (3) ゾーリンゲン放火事件
 - (4) ゾーリンゲン放火犯少年の精神鑑定
(以上第17巻第2号)
 - (5) 立ち上がる市民
 - (6) ネオナチ周辺のある若者の日常性
 - (7) ネオナチ・ユーゲントの日常性
おわりに

4. ネオナチ・ユーゲントの日常性

ネオナチによる外国人襲撃事件で衝撃的であったのはロストック市の難民申請登録・収容センター放火事件と群集、メルンとゾーリングゲンにおけるトルコ人家屋への放火・焼死事件であった。ロストック事件についてはわが国でも熊谷徹と山本知佳子によって報告されている。とくに前者は現地調査も加え、事件の全容をほぼ伝えている。ここでは、ロストックについてはこれらの報告に依拠し、またメルンとゾーリングゲン事件についてはその犯人検挙・裁判にいたるまでの事実を追いながら、ネオナチ周辺にいる若者と市民の日常性を共に探してみたい。

なお、ここで、1992年11月以降、外国人襲撃の標的にされたトルコ人の数を概観しておこう。下表は外国人中トルコ人が圧倒的に多数を占めていることを示している。その数は1992年当時ドイツに滞在している外国人約350万人中約170万人、48%を占めた。このうち同年9月時点でドイツ国内で生まれ育っている年齢別人数をあげると、0—6歳[183千人]、6—10歳[114千人]、10—16歳[205千人]、16—18歳[84千人]、18歳以上[1,088千人]であった。この各年齢別の数字も第2位のユーゴスラヴィアに比べて3—6倍多くなっている。トルコ人家族は伝統的に大家族制をとり、4世代まで同居する。さらに家族と親戚はあらゆる点で互助の絆で強く結ばれている⁽¹⁾。これらのことがドイツ市民にトルコ人が目立つ要因になっていた。

国	籍 総計(人)	10—15歳	15—20歳	20歳以上	10歳以上
トルコ	1,675,900	24.99%	27.73%	15.08%	67.80%
ユーゴスラヴィア	652,500	12.84	27.65	35.65	76.14
ギリシャ	314,500	9.63	21.34	40.67	71.64
スペイン	134,700	8.46	23.68	54.71	86.86
ポルトガル	84,600	15.25	39.48	21.51	76.24
イタリア	548,300	15.98	18.53	37.57	72.08
モロッコ	67,500	20.00	16.15	11.70	47.85
チェニジア	25,900	19.69	22.01	17.37	59.07
計	3,503,900				70.86

(Informationen zur politischen Bildung, Nr. 237, 4. 1992, München, S. 19.)

(1) ロストック放火事件

ロストック放火事件は私がドイツに渡る2ヶ月前の1992年8月におこった。ロストックは旧東ドイツ北部メクレンブルク・フォアポメルン州の、バルト海に面した港町である。その中心街から車で15分ほど北西に走ったりヒテンハーゲン地区に高層住宅(11階建)が建っている。この棟の一番東端にはベトナム人労働者約百人が東ドイツ時代から入居していた。1990年末には棟西側に亡命申請者の登録・収容センターが設置されていた。

1992年に当センターに亡命申請者が急増しており(1月に513人、7月に1482人)、その大多数が東ヨーロッパ、とくにルーマニアのシンティ・ロマ(ジプシー)であった。その急増はセンターの収容能力をこえ、そこをあふれたシンティ・ロマが団地前の芝生で生活しはじめた。その生活ぶりが現地の市民感情を刺激した。一つは、「ドイツでも、芝生に立ち入らないことは

常識である。その芝生が外国人の臨時の宿泊所になったことが、まず住民の神経を逆撫でした。」二つは、一部のシンティ・ロマたちが「施設のトイレを使わず、芝生や生け垣で用を足していた。夏の暑さの中で(1992年の夏は猛暑であった：引用者)悪臭が漂う。清潔好きなドイツ人にとっては、耐え難い状況であった。」(これはシンティ・ロマの「後進性」ではなく「生活習慣」とみたほうがよい：熊谷)三つは、シンティ・ロマの「親たちは子どもに物乞いをさせた。多くの市民はお金をせびる「ジプシー」の子どもたちをみて、憤慨する。」このような光景が市民の日常生活の只中に現れたとき、市民が最初にとった行動はセンターの立ち退きをもとめる署名運動であった。市当局は8月中旬にセンターの移転を正式に決定した。だがその直後に放火事件が勃発したのである⁽²⁾。

8月22日土曜日夜。「極右グループに属する地元の若者ら1,200人」(山本、望田ともに1,503人⁽³⁾)が火炎瓶と投石で襲撃した。この襲撃は23日日曜日の朝方まで十時間以上続き、その日の午後にも再び繰り返された。そして24日の晩にベトナム人が入居する東端が放火された(22日から24日の襲撃日時については熊谷と山本・望田両者間に記述のズレがみられるが、ここでは熊谷のそれに従った)。とくに23日の襲撃には「群集2,000人以上」(望田は「2,000人ほど」、熊谷にはこの数字の記載はない)に膨れあがり、このなかには「まわりを取り囲むようにして見物したり、声援を送っている人たち」もいた(熊谷の記述では「付近の住民は祭りの見物でもするかのように燃える住宅を眺め、暴徒に声援を送った。』)。この2,000人ははたして野次馬で見物するだけの人たちであったのだろうか。

最初の動機はおそらく「見物」「傍観」を目的とする人たちの単なる集まりであったかもしれない。それを否定も無視もできないであろう。だが、放火に呼応して「外国人のことを憎たらしいと思うのは当然だよ」「奴らを追い出すためには、このくらいエスカレートしたほうがいいんだよ」⁽⁴⁾、「外国人は出ていけ」「ドイツ人はドイツ人のために！」⁽⁵⁾と叫ぶ人たちは明らかに襲撃者を支持・援助することをおして自分たちの主張を明確に表明することを目的とした群集と化しているではないか。さらにここに集まった者のなかには23日の地元紙に「リヒテンハーゲン地区の利益を代表する市民グループ」がセンター前で集会を開くという記事を読んで集まったものが少なかった⁽⁶⁾。そうした群集の一人は、投石に加わった17歳の高校生徒を、「あの子たちはネオナチでも極右主義者でもない。普通のドイツ人さ。町に住んでいる外国人たちに我慢がなくなっただけのことだよ」と「擁護」した⁽⁷⁾。

このようにロストックのリヒテンハーゲン地区の一角は、市民を反外国人とその排斥を暴力で主張し行動する群集へ変えさせる空間と化したのであった。また、この空間は普段の日常生活とは異変な次元の上に生じたものとみなすこともできない。あの芝生で営まれていたシンティ・ロマの異文化を通り過ぎに何度も目撃していた市民の不満・嫌悪・拒否の感情がこの群集空間のなかで吐き出され、言語と行動で表出されたものであった。そうした行為の媒体となったものがネオナチ・ユーゲントのラディカルな投石と放火であった。群集の行動がシンティ・ロマからベトナム人に向かったことも、その群集の性格からして、まさしくそうしないではすまされない形で進行したといえよう。その空間は、『ツァイト』紙でさえも、「アウシュビッツの焼却炉の前段階だ」と表現せざるをえない様相を呈していたのであった。

(2) メルン放火事件

事件発生

1992年11月23日から24日にかけて、シュレスヴィヒ-ホルシュタイン州メルン市でこの事件が発生した。メルンの旧市街地から5百メートルほど離れた2軒の、いずれもトルコ人の建物が同日深夜0時30分と翌朝1時10分の2回にわたって放火され、5時間後に鎮火した。就寝していたトルコ人がその犠牲となった。51歳の夫人、その姪14歳そして孫娘10歳が焼死した。そして若い母親はパニックに陥り、窓から飛び降り歩道に頭を打ちつけてしまった。犯人は何者か。この事件を担当したカールスルーエ連邦検察庁は犯人を特定できずに殺人罪を適用した。しかし犯人を特定する証拠は残されていなかったのか。新聞報道によると、放火直後に一人の男が警察と消防に、「ラッツェブルガー・シュトラッセ（またはミューレンシュトラッセ）に家が一軒燃えている。ハイル・ヒットラー。」という連絡をいていた。当地の警察はこの犯人を「殺人および殺人未遂」で捜査する特別捜査チーム（23名）を編成し、カールスルーエ連邦検察局が直接捜査の指揮をとることになった。また連邦検察局はこの事件を「連邦共和国内の秩序を脅かすものである」という認識を示した⁽⁸⁾。

さて遺体は27日にハム市のモシェー（回教徒寺院モスク）に運ばれた。イスラム教聖職者が犠牲者に祈りを捧げた。「神よ、人類に理性をお与えください、そうして人々が平和のうちに生きることができますように」と。棺はハンブルクからトルコへ空輸された。あまりにも悲惨な帰国であった。一方、事件から4日後に2名（この時点では「北ドイツ出身」と報じられている）の「右翼急進主義者」が逮捕され、連邦政府内務大臣ザイタースは、「右翼急進主義の扇動と暴力にたいする明確な最強の警鐘」として、ネオナチ組織MF（国民主義戦線）の活動を禁止した。さらに『デア・ターゲスシュピーゲル』紙は2名の逮捕者をもって今回の襲撃が「集団であるとはこれまでのところ立証されていない」と、かなり確信をもって、報じた⁽⁹⁾。以下で2名の「犯人像」を追ってみたいが、その前にいま一つのエバースヴァルト放火襲撃事件を取り上げておきたい。

ブランデンブルク州のエバースヴァルト難民収容施設に1992年12月27日日曜日朝火災が発生し、全焼した。当施設には約60名の入居者がいた。その多数はルーマニア人で、その他にブルガリア人とアフリカ人も入居していた。焼失跡からガソリン缶と火炎瓶の残骸が発見された。ブランデンブルク州内務大臣ツィールは、この火災を放火とみなし、犯人は極右主義者で、先の連邦政府によるネオナチ組織NFの活動を禁止したことに対する報復行動である可能性が高い、さらに続けて、「一集団を禁止することだけでは不十分であり、あらゆる「極右主義の思考様式を根絶する」ことが緊要である、と表明せざるをえなくなった⁽¹⁰⁾。大臣ツィールのこの見解は、連邦政府内務省の認識では状況に的確に対応できなくなっていることをも同時に衝いたものであった。それでは「極右主義の思考様式」はどの次元で読みとることができるのか。

メルン放火犯逮捕劇

カールスルーエ連邦検察局は12月1日にメルン放火犯人逮捕を報じた。ミカエル・ペータース25歳とラルス・クリスチャンゼン19歳の「極右主義者」で、ペータースは「ネオナチのリーダー」でもあった。最初にクリスチャンゼンが11月29日に逮捕され、共犯者ペータースを自白した。一方ペータースはその前の週にネオナチグループのメンバー多数とともにテロの共同謀議で逮捕されていた。捜査報告によると、ペータースとクリスチャンゼンは23日真夜中前にメルンでうち合い、クリスチャンゼンの車で最初にラッツェブルガー・シュトラッセに行き、そ

こで36人のトルコ人が居住する複合世帯住宅にアルコール(モロトフ・コックテール)を投げた。0時30分頃にペータースがメルン警察署近くの電話ボックスからあの通報(「ラッツェブルガー・シュトラッセに家が軒燃えている。ハイル・ヒットラー」)をかけたのであった。その2人はミュレンシュトラッセに出て、トルコ人が住むいま一つの家を放火した。そこに住む51歳のバヒデ・アースラムと10歳の孫イェリツ・アースラム、それに14歳の姪アイセ・アイルマツが犠牲となった。1時直前にペータースはふたたび電話ボックスから2回目の通報(「ミュレンシュトラッセに家が軒燃えている。ハイル・ヒットラー」)をしたのである⁽¹¹⁾。2人は間もなくリュウベック拘置所に収監された。

カールスルーエ連邦検察庁の捜査報告によると、クリスチャンゼンは1992年9月初めころにペータースのネオナチグループの一員になっており、9月5日のメクレンブルク-フォアポンメルン州ブリツィールの難民収容施設襲撃未遂事件に参加していた。一方ペータースについては殺人・放火ならびに騒乱罪が適用され、彼のグループメンバー10名がさらに検挙された⁽¹²⁾。

ところがクリスチャンゼンとペータースはリュウベック検察局に別の犯罪容疑をかけられていた。11月5/6日にペータース他3名の若者はメクレンブルク-フォアポンメルンとシュレスヴィヒ-ホルシュタインの両州で難民収容施設放火の嫌疑をかけられていたのであった。11月17日にリュウベック検察局はこの4名のネオナチ・ユーゲントを騒乱罪と殺人罪で区裁判所に逮捕状を申請していた(クリスチャンゼンについてはこの時逮捕状は申請されなかった)。しかし裁判官はこれを認めなかった。これに対して検察官メラーは19/20日に再度逮捕状発行を強く要望した。だが今度も却下された。この裁判所の措置がメルン事件の対応にも尾をひくことになった。つまり2度目の申請が出された2日後の23日月曜日深夜にメルン襲撃事件が引き起こされたのである。24日、連邦検察庁は、シュレスヴィヒ州検事長オステンドルフに対して、急速リュウベック宛メラー検事の逮捕状申請書を送るよう要請した。連邦検察庁の言い分は、19日に逮捕状が出されていれば、ペータースはリュウベック検察局に身柄を拘束されていたであろうから、メルン事件は起るべくもなかった、であった。検察庁側の苦渋と後悔がありありと目にうかぶ。だがシュレスヴィヒ-ホルシュタイン州首相エンゲホルンと法務大臣クリンガーは司法の独立を楯に裁判所を擁護した。一方、連邦政府の対応をみると、コール首相はネオナチ・ユーゲントを現行法より厳しく処罰する青少年刑事法強化を口にしたが、法務大臣ロイトホイサー-シュナレンベルガー(自由民主党)はこれに反対を表明し、その一方で青少年省大臣メルケンは市民に対してネオナチ・ユーゲント系音楽グループの演奏活動を拒否するように呼びかけた。以上のような州政府および連邦政府内部における認識と対応策をめぐる対立と混乱は、ネオナチ・ユーゲントの実像がいまだ双方にとらえられていないことを浮き彫りにした。こうした論議のさなか、クリスチャンゼンは拘置書で動脈を切り自殺をはかった(未遂)⁽¹³⁾。

見えない犯人の顔

当然のことながらリュウベック検察局は州政府の司法独立論に対して、25日、厳しい口調で反論した。メルンの殺人は、裁判所がペータースの逮捕状を出していたならば防げたであろう、と。だがそのリュウベック検察局は、メルン襲撃事件当初、これを、ネオナチではなく、テロ組織の犯行であるとする認識をもっていた。さらに興味をひかれることは、メルン市民も事件2日後の木曜日(26日)ながらも同じメルン市民であるペータースのみならずクリスチャンゼンが放火・殺人者であることを信用していなかったことである⁽¹⁴⁾。一体ペータースとクリスチャンゼンの虚像と実像はどのようなものであったのか。

ラルス・クリスチャンゼンは、普通の家庭の出身で、学校を卒業して同市シュヴァルツェンベック地区にある小市場に構える支店の見習い職人であった。彼の就労時間も守られていた。彼はさらに終業後に職業補習学校にも通っていた。支店長は彼を評価していたが、同時に彼の人格コントロールに若干の不安を時々感じていた。ここまでがクリスチャンゼンの昼の顔であった。夜になるとそれは一変した。彼はスキンヘッズの服装をまとい狂信的なネオナチに変身する。彼はアパートを借りていた(父親が家賃を払っている)。その室内には帝国軍旗とヒトラーの写真、外国人排斥を記したプラカードが発見された。

ところでメルン市には19人のスキンヘッズが認められていた。彼らはときどきトルコ人を殴るといった暴力行為を起こしていた。だがその一方で夜をトルコ人とディスコで楽しんでいた。このグループがペータースと接触をもっていた。なかでも、とくにクリスチャンゼンが彼と親密な関係を結んだ。これがクリスチャンゼンをネオナチへ急接近させる転機となったとみられる。ペータースはメルン市から約2キロメートル離れたグドウ出身であった。彼は学校時代に知的遅進者と評定されていた。彼の日常行動は「非常に憶病でノロマ」で、放火・殺人を犯す事など想像もできない、というのが彼に対する大方の評価であった。だがペータースもいま一つの顔をもっていた。誰も彼の狂信的・急進的な行動に気づかなかただけのことである⁽¹⁵⁾。このようにクリスチャンゼンとペータースは2つの顔をもっていた。一方はごく普通のどこにでもいる若者のそれであった。だがそれは狂信的なネオナチの顔に変貌する。この2つの顔はクリスチャンゼンとペータース自身からすれば1つの顔であり、かれらの日常性を刻印するものであったのである。

犯人のその後

1993年5月25日、シュレスヴィヒ上級地方裁判所法廷でペータースは自供を全面否認し、事件当夜の新たなアリバイを申し立てた。その内容は次の如くであった。ペータースは襲撃直前の夜にグドウの居酒屋にいた。ほぼ22時頃に母親が迎えにきて、2人でシュヴァルツェンベックへ車で戻った。その後シュヴァルツェンベックの自宅で母親とチェスをやり、夜を過ごした。従って問題の夜(1992年11月23日)は母のもとで過ごしており、襲撃現場にはいなかった、というものであった。さらにペータースの弁護士ロルフ・ボスイは、拘留後の供述は不法な尋問のもとでなされたものである、その理由として被告は自白の時点で極度に疲労しており、彼の精神の自由は抑圧されていた、と主張した。これに対して検察側は弁護士ボスイの非難を「悪意のある中傷」と厳しく反論した。ペータースも、さらに、自由に話せた事柄はわずかで、他は新聞記事または警察官が事前に書いたメモからえたもので、結局「警察の言いなりになった」と申し立てた。裁判官および検察側は、直ちに、ペータースに、なぜいまになって自白を否定するのか、なぜ2月の尋問のさいに否定しなかったのか、と尋ねた。これに対するペータースの回答は、「尋問から解放されたかったからだ」、それに尋問中、自分はどっちみちもはや信じてもらえない、というものであった。これにはペータース自身に問題があった。彼はすでに9月6日と12日にグドウとコロウの難民収容施設を襲撃しており、この発覚の恐れが彼の心理状態を追いつめていたからであった。

審理はペータースのアリバイの真実性をめぐって紛糾した。しかし、肝心のペータース自身が、アリバイ審理にさいして、母親とどのくらいチェスをしどちらが勝ったのかについて、回答不能におちいていた。彼の返事は万事が「はい」、「そういうこともありうるかもしれない」、「知らない」であった⁽¹⁶⁾。

ペータースは終身刑になることを予想し、これに怯えていた。一方のクリスチャンゼンは、すでに述べたように、拘留中に自殺をはかっていた。拘留中における極度に不安な心理状況をうかがい知ることもできよう。しかしながら必死に不当な尋問とアリバイを申し立てるペータースにはあの襲撃犯の顔は見えてこない。クリスチャンゼンの自殺未遂についてもそうである。不安にさいなまれ怯える普通の放火・殺人被疑者のイメージのみが伝わってくる。

だがペータースの隠れたいまひとつの顔は計画的なネオナチ指令者のそれであった。それをしめす格好な記録が残されている。それは上であげたメルン近郊グドウとコロウ両難民収容施設放火事件に関するものである。この事件は1993年6月10日にリュベック州裁判所で審理された。以下はその記録からの抜粋である。両襲撃にペータースとクリスチャンゼンが首謀格として関与しており、実行犯は10名の若者たちであった。その内9名は16—20歳の男性、1名は18歳の女性であった。彼らは通常各5名単位でグループを作っていた。グループはペータースの命令で襲撃を実行した。まずペータースがグドウとコロウのトルコ人家族を標的に選び、9月6日と12日に襲撃の命令をグループのリーダーに伝えた。コロウの施設襲撃では、18歳の女性がペータースの指令でそのグループの襲撃を指揮した。襲撃命令の内容はペータース自作のベンジン火炎瓶を施設に投げることであった。この火炎瓶は2ヶ月後にメルン襲撃に使用されたものと同一のものであった。襲撃前にペータースは実行者と下見もしていた。ところで10名の若者はスキンヘッドではなく、長髪、ジーンズ、スポーツシューズの立派な若者であった。それでは彼らが襲撃を実行した動機はなんであったのか。

ここでも確かにネオナチ(指導者格)とフリーガンとの関係が読み取れる。とすると彼らはペータースの指令にただ服従しただけだったのか。18歳の女性は、冒険心、グループの強制そして外国人に対する強い嫌悪を上げた。ただし火炎瓶を投げたことについては、それによって「どんなことになるか知っていた、私は気のりがしなかったけどさ」と供述した。また16歳の男性は、人を殺す意思はなかった、「たださ、見せかけの難民になにか見せしめをしめしたかった」と自供していた⁽¹⁷⁾。このように、若者グループを外国人襲撃へ駆りたてた要因は、ペータースの命令のみではなかった。その若者たちに反外国人感情が潜んでいた。ペータースは、ネオナチ周辺の若者の日常性に潜むこの反外国人感情を鋭敏に察知し、それを解き放ち、行動へと鼓舞させたのであった。若者の日常性にはこうした行動へ容易に点火される感情がうごめいていたのである。

1993年11月23日夜。メルン市民は、手にローソクを持ち、ちょうど一年前のネオナチ襲撃に光のデモで抗議を表明した。被疑者2人の判決はまだ下されていない。またロストック市では市長がようやく責任を認めて辞任を決意した。事件後1年5ヶ月をすでに経過していた。そして12月8日、シュレスヴィヒ上級地方裁判所はペータースに終身刑、クリスチャンゼンに10年の刑を言い渡した。

(3) ゾーリンゲン放火事件

トルコ人の憤怒

1993年5月28日金曜日夜。ルール工業地帯の刃物の町ゾーリンゲンでトルコ人家屋が放火された。メルン同様に無残な犠牲者がでた。2日後に警察は1人の16歳の容疑者を逮捕した。ここで事件発生時の容疑者の行動を再現しておこう。容疑者は土曜日の早朝2時直前にウンテレ・ヴェルナー通り81番地にあるトルコ人ドゥルムシュ・ゲンチ夫婦他5世帯19人が同居する

2階半の家屋に放火した。消防の報告によると、階段にベンジンが撒かれた。ヴェルナー通り81番地は廃墟と化した。消防車はそれ程遅れて到着したわけではなかったが、肝心の消火栓がなかった。目撃した隣人は「なす術がなかった」と怒りに震えながら語った。長女(27歳)、4女(18歳)、長男の娘2人(9歳、4歳)と姪(12歳)は亡くなった。その他に4名が重傷の火傷を負った。その中の15歳の若者は月曜日に短い生涯を閉じた。ゲンチー族はすでに25年間当地に住み、その子どもはドイツで生まれ育っており、トルコ本国にいけば子どもたちは外国人に扱われる。最年長のアタスは、ドイツ人に対して「わたしは素直にチュス(今日は)と言うことができない」と強い口調で語った。

葬儀は火曜日にデュッセルドルフとケルンで執り行われた。月曜日夜に5百人のトルコ人若者の抗議デモが深夜22時10分から翌日5時55分までくりひろげられ、さらに1時35分から11時15分までアウトバーンの出入口が車で封鎖された。この間にトルコ人の激しい憤怒が爆発した。29日午前1時、百人のトルコ人がヴェルナー通り81番地に通じる交差点から現場へむかった。そこでかれらは警察に阻止された。警察官はプラスチック製の楯でここを遮断しており、彼らを強引に排除した。その警察官は、「われわれはそんなことをしたくないよ、12時間ずっと配置について交代なしだ、われわれは政治家の後始末をしなければならないというわけさ」と拳を振り上げて語った。トルコ人たちは再び交差点に後退し、そこで新たな加勢をえて警察と再度衝突した。投石が始まり、家屋の窓ガラスが割られた。なかでもイスラム原理主義グループ「アラフ・アクバル」と極右主義トルコ人組織「灰色狼」の両メンバーはドイツに対する憎悪を建物や路上に駐車する車に表出した。攻撃目標は次第にショーウインドウ、電話ボックス、ミュールトネン(ガラス瓶・空き缶等不燃焼物を収納する大型のごみ箱)へと拡がった。商店街では略奪が始まった。ここへは午前2時ごろに警察が入り、数人の若者が逮捕された。その一方で例の交差点では、人数が増えだし、木材が燃やされていた。そして午前3時になって、警察官は、交差点からトルコ人を排除して、消火にあたった。

29日朝、店を壊された店主たちは「被害にあった人には心からお悔やみ申し上げるよ、けどこれはひどすぎるんじゃないの」、または「暴力に暴力で対抗するのはもうこれで終わりにしたいね」、と口々に語っていた。一方市長のゲルト・カイマー(SKD)は、放火とその後の騒ぎが「外部のグループの仕業」とみ、次のように述べた。「これは混乱、憎悪、憤怒、無力だ、ゾーリンゲンでは何年来外国人同僚との良好な関係は維持されているのに」と。これに対して、「ベルリントルコ人共同体」(TCB)議長ムスタファ・T. カクマコグルは怒りを力めて抑えて、次の趣旨の声明を読み上げた。ドイツ人とトルコ人の平和的な共生が今後も促進されなければならない、「ドイツ人の多数は外国人と連帯している」、TCBはいかなる場合にも自己防衛体制をとらない、と⁽¹⁸⁾。

進展しない事件解決

6月1日火曜日に警察は5月28日-29日の一連の事件について説明した。それによると、騒ぎ発生の経緯は次のようであった。一人の男が車で約2百メートル離れて封鎖されていた交差点の遮断棒(これはゾーリンゲン市内への出入口用に設置されていた)突破を試みた。その際に男は若い女性をはね飛ばし負傷させ、逃亡した。警察は男を追跡し、逮捕、拘留した。車には男の他に1名が同乗しており、両者ともにハーゲン市のスキンヘッズであった。この事件後警察は交差点を完全に遮断したのであった。これが結果的に上でみたような衝突と騒乱を呼んだのである。

6月3日水曜日、警察は通報により新たな騒ぎが準備されている情報をえた。だが警察官千人以上が待機しただけに終わった。6月1日月曜日、連邦検察庁は、すでに同日殺人容疑で逮捕した16歳のネオナチ・ユージェントの自供にもとづいて拘留した4人の共犯容疑者の取り調べ後に、この16歳の少年を釈放したのである。一方その4人の若者は逆に逮捕された⁽¹⁹⁾。だがその後も放火犯人の手がかりは依然として発見されなかった。悪魔はこれを嘲り笑うかのように、他の場に次々とその触手をのびした。6月5日土曜日夜にルール工業地帯のハッティンゲン市コンスタンツ地区でトルコ人レストランが放火された。中にいた母親と5人の子どもが炎のからかうじて逃れたが、建物は全焼した。同日同時刻にハンブルク北のバート・オルデスローエでトルコ人家屋が放火された。幸い負傷者はでなかった。

警察は、ハッティンゲン市の放火当時、現場5ヶ所で目撃された一人の男性を追跡した。これと同時に進行で、州刑事局特別捜査本部は6月5日土曜日に起こったコンスタンツ地区における放火（トルコ人レストラン経営者が焼死した）について捜査をおこなった。しかし容疑者は特定されなかった。発見されたのは、この地区では外国人に敵対的な住民感情が支配的であったことである（バーデン・ヴュルテンベルク州内務大臣ビルツェレの発言）⁽²⁰⁾。一方ゾーリンゲン放火犯の動機は謎に包まれたままである。これに対する行政側の責任も追及されていない。メルン事件とは対照的である。

「過去はユダヤ人 現在はトルコ人」

放火襲撃から3日たってもトルコ人の抗議は続いていた。6月1日、ヴェルナー通り81番地の焼跡で集会が持たれ激しい口論と激論がかわされた。この場で初めて己をトルコ人と名のつた人たちがいた。彼らはこれまでこの地区に住んでいたが、トルコ人であることをドイツ人に隠していたのである。それはアイデンティティにかかわる問題であった。若者についても全く同様であった。その論議する場で若者はまず「おれはトルコ人だ、ここで生活している！」と名のつた。この一言を発することの逡巡、それに耐えることの内面的苦悩、これが言葉で行動でいま吐き出された。初老の女性はその苦悩を絞りだすかのように、一人のドイツ人の顔を直視しながら、しわがれた声で己を語り始めた。「私は30年以上ここで働いているよ、税金も納めている、それは何のためなのさ？」と。夕方市内からヴェルナー通り81番地に向けてデモ行進が出発した。一人のトルコ人若者は「一体おれたちトルコ人は外国人なのか？」と書いたボール紙を掲げていた。この若者の苦悩も深い。彼は決してドイツ人に敵対しているのではない。だがそのドイツ人はトルコ人を外国人として排斥する。デモ行進にひととき目だったいま一つのプラカードは「過去はユダヤ人 現在はトルコ人」であった⁽²¹⁾。

トルコ人とドイツ人の共通の敵はネオナチである。それははたしてドイツ人の日常性の上に成りたちうるテーマでありえたであろうか。ハッティンゲン市で放火されたコンスタンツ地区で外国人に敵対的な住民感情が支配的であったとする州内務大臣の言明はこの日常性を映しとっていたのであろうか。

ここで『トルコ毎日新聞』ドイツ特配員ディレク・ツァプトシオグルー・ロッゲの論説を紹介しておこう（彼女は1988年以降現職）。メルンとゾーリンゲン事件はトルコ人襲撃史上質的な転換を示すものであった。それを一言でいえば、トルコ系住民に新たな「自己意識」をつくり出したことである。トルコ人は決して移民者ではなく支配を受けた歴史をもたない国民である。誇りをもっている。とくにドイツで生まれ育った第二・第三世代はドイツを故国とみなしており、ここを棄てる意思をもっていない。そうしたトルコ人の気持ちをいま適切に表現する言葉は「悲

嘆」と「怒り」である。彼らは犠牲となった人たちだけでなく、自分自身とこれまでドイツで過ごしてきた日々、そして未来を「悲嘆」している。ある若い女性は「私はドイツの市民権を申請した、だが私はそれを取り下げた」(ドイツでは血統主義を採用しておりトルコ人二世は自動的にドイツ国籍をとることができず、したがって選挙権もない)と、また若者は「ぼくはドイツ人とうまくやっていると思っていたよ、ただどこいまここでは真の友人をもてないということがわかったよ」と語った。とくに若者の怒りは深い。「俺たちの両親はここで働いてきて、税金を納めたくさんの消費をしてドイツ経済の奇跡に貢献している。俺たちはいま東ドイツの復興に財政的な協力をしている。その報いがこれだったのか」と。こうして強化された自己意識は不快・怒り・爆破と紙一重であった。かといって多数のトルコ人があの市街戦を是認したのではない。全く逆であった。彼らは反暴力である。それでは政治家と行政の対応でどうであったのか。

ロッゲは、ドイツの政治家の反応はあまりにも鈍すぎる、敢えて大胆な言い方をすればと断りながら、国家は意図的に対応を遅らせてきた、と非常に手厳しい見方をしている。たとえばコール首相に対して、大統領が葬儀に参加したことは喜ばしい、だがトルコ人がそれ以上に期待していたものは、この国の政治家のトップにある首相がここに参列しトルコ人に言葉をかけること、であった。この批判の背景には、ドイツ国籍・選挙権取得上の壁である血統主義があった。大多数のトルコ人はドイツに永住したい意思をもっている。だがその意思のまえにはつねに「外国人問題」が横たわっている。トルコ人がこれまで日常的に思い知らされていることは、民主主義において選挙権と投票権をもたない人間は二流の市民にすぎない、ということであった。

ロッゲはさらに間接的にドイツ市民にたいしても警句を発する。あるトルコ人若者がいっているように、「ネオナチ・ユーゲントは路上では見えてこない、殺人を犯したときに初めて見えてくる」と。彼女はこの理由の一つに、ネオナチとドイツ市民との日常性が共有されているからだ、と指摘する。つまり、「ドイツ民衆の大多数がネオナチ・ユーゲントの背後にたっている」、そのことをネオナチ・ユーゲントは「確信」している、と。したがってドイツ社会はその内部からネオナ・ユーゲントの殺人と襲撃を精算し、日常生活からネオナチを排斥しなければならない。

ネオナチ・ユーゲント跳梁の根はまさしくドイツ市民の日常性次元において絶やさなければならない、とする女性ジャーナリストロッゲの指摘はまことに鋭い。彼女はその論説の最後をつぎのように閉じた。「長期にわたってトルコで生活した一人のドイツ人の友人はかつてこう語った。「あなたがたトルコ人とわれわれドイツ人は一つに手を結びあっている。われわれはともに無条件にすべての人たちから愛されたいと願っている。」まったくそのとうりである。そのためにはとにかく生きていなければならない。」⁽²²⁾。

「ドイツ人すべての責任」

6月3日木曜日、5人の棺は焼失した自宅に別れを告げた。その子の棺を前に嘆き悲しむ父親に涙を誘われる。ケルンとゾーリングゲンで犠牲者の葬儀がおこなわれた。ケルンのディティブモスクで執りおこなわれた中央葬儀にヴァイツゼッカー大統領とキンケル外務大臣が親族と多数のトルコ人とともに参列した。翌日棺は故国へむかった。

中央葬儀にトルコ側の代表(人権省大臣、官房大臣、ドイツ大使)が弔辞を読んだ。なかでも人権省モハメト・カハラマン大臣とアキン・ゲネン官房大臣の弔辞は厳しいものだった。い

ずれも公式的な文章が続いた末尾に、「われわれがまた望んでいることは、ドイツ人が右翼急進主義者を支えないことです」(カハラマン大臣)、「われわれは多数の右翼急進主義政党と組織が解散させられたと聴いている。だがゾーリングゲンではこれが実現されていなかった」(ゲネン官房大臣)、と⁽²³⁾。一方、ドイツ側からヴァイツゼッカー大統領が弔辞をのべた。

「メルンとゾーリングゲンの殺人は同一の凶行である。それは右翼急進主義的な作られた風土から生まれたものである。その実行者は無から出たものではない。」ここでもその政治的「風土」に注意が喚起されている。「右翼急進主義を脚色したシンボル、パロール、パンフレット」が若者に「かすかな炎を閃光に変える」暴力を容認させている。これを「監視によって抑えることでは十分ではない。われわれに欠けているものは法の規制強化ではない。この背景に毅然と対決することが必要なのである。」「昨年秋の光の鎖(ローソク行進)は一人一人の良心を揺り動かし」、「声明によってわれわれの政治的責任、つまり、ドイツ人がいまいかにその内深く警鐘を打ち鳴らされているか、を公にしめした」。だがその「光の鎖は警察と裁判所の代わりとはならない」。そればかりかその「国家の機関は無関心な、無感覚なそして無責任な社会において無力であるではないか」。とすると、結局、「若者が放火犯や殺人犯になるのは、彼らにのみに責任があるのではなく、われわれすべてに責任がある」。その「すべて」にヴァイツゼッカー大統領は「教育に影響を及ぼす家庭、学校、団体、自治体さらに政治家」をあげ、そして「責任」とは「子どもらを教育しそしてかれらを孤立から解き放つ責任と義務をわれわれが分かち合うことである」。またこの「責任と義務」は「断固たる倫理的な義務」である。「ゾーリングゲンとメルンの犠牲者はドイツ人すべてに」この「義務」を「想起するように促したとみるべきである」。「われわれの義務は他の国籍をもつ同胞、とくにトルコ人にむかったときに、すでにずっと長く隣人であった体験から自ずから現れ出てくるものである。」弔辞は以上に加えて二重国籍実現に努力すると表明している⁽²⁴⁾。

弔辞そして大統領という2つの制約からであろうか、ヴァイツゼッカー大統領の主張は「断固たる倫理的な義務」感の覚醒をドイツ市民に訴えるものとなっている。しかし問題なのは、さらにそれが深刻であるのは、この「義務」感が「自ずから現れ出てくる」「体験」の深層に反トルコ人意識も同じように潜んでいることである。このことはこれまでたびたび言及してきたが、10年以上ドイツに滞在する山本も鋭く指摘する。「外国人を襲う若者たちは、政治家や親たちが、遠回しにいたり、陰でささやいている日常生活にひそむ偏見や差別意識を、おおびらにいい、行動に移しているにすぎないのだ」と⁽²⁵⁾。「断固たる倫理的な義務」は、市民の日常性の次元で、これを否定する反外国人・人種主義に共感する感情と価値志向を批判し、さらにこれにかわりうる正統性を獲得しなければ、変革的な力とはなりえない。そのことを日常生活で実践することは果たして可能であったのであろうか。

(2) ゾーリングゲン放火犯少年の精神鑑定

放火犯少年の「孤独と憎しみ」

容疑者はクリスチャン.R(16歳)、フェリックス.K(16歳)、クリスチャン.B(20歳)、マルクス・ガルトマン(23歳)の4名であった。4人の被告が犯行に至った経緯については、裁判記録とともに、野中恵子の現地報告からようやく詳しいしかも正確な情報を得ることができるようになった。私は野中のこの報告を読んでいくなかで1人の少年に注意を惹かれた。野中も同じだったようで、その少年の「ゆがんだ青春」が「影の少年」「孤独と憎しみ」の小見出しを

付されて描きだされている。私もこの少年を追ってみたいと思っていたおりに、彼の精神鑑定にあたったクリスチャン・エッガースの論文⁽²⁷⁾を入手したので、これを紹介しておきたい。先ずは野中の記述を要約しておこう。

1994年7月12日、連邦検察官による求刑論告が朗読された。クリスチャン・R、フェリックス・K及びクリスチャン・Bは少年法適用による禁固10年、マルクス・ガルトマンは終身刑を求刑された。傍聴していた野中はその求刑瞬時の被告人の表情を次のようにスケッチしている。「Rは無表情でうつむいたまま不動、Kは不安な面持ちで辺りをみまわし、Bは面をあげて嘲笑をうかべ、ほうづえをついたガルトマンの顔は紅顔していた。」⁽²⁷⁾「無表情でうつむいたまま不動」であったクリスティアン・Rの表情が確かに彼の「ゆがみ」の部分を際立たせていたようだ。

クリスチャン・Rはゲンチ家から50メートルほど離れた近所で母ブリギッテ(40歳)と内縁相手(49歳)と住み、しかもゲンチ家の5女ファディメ(17歳)及び弟と毎朝同じバスで通学しており、相互に顔見知りだった。事件の前夜彼の遊び仲間に、自宅からゲンチ家を指して「あのトルコ人の家、見えるか? 2週間後の朝、燃えるんだぜ」とつぶやいていた。それではクリスチャン・Rとネオナチとの関係はどうであったのか。彼は、他の被告とは異なりその組織には属さない「単独のネオナチ」であったと見られている。だが、ネオナチ・ユーゲントと組織との関係は組織に所属しているか否かは決定的ではない。すでに指摘したように、ネオナチ・ユーゲンは日常的には組織の指導者の周辺におり、それがスキンヘッズと一線を画するのはナチズムという世界観への同一化にあった。

クリスチャン・Rの部屋の壁には、メルンの放火犯クリスチャンゼンの部屋同様に、確かに、ハーケンクロイツやナチスのポスターなどナチズムを表象するものから非合法の「ネオファシスト的な幹部組織」国民主義戦線のプラカード、「外国人侮蔑」のプロパガンダが掛っていた。さらに、ネオナチ派ロックグループのカセットとCDも多数押収された。裁判長はこのクリスチャン・Rの部屋が「語る証言」に、「私の意見ではクリスチャンは狂信的な極右主義者です!」と述べた、と野中は伝えている。だが、野中は精神鑑定によって報告されたクリスチャン・Rの「影」に注目している。一言で、「孤独と憎しみ」と表現されている。それを要約しておこう。第一に、クリスチャン・Rの母ブリギッテの家系の異常性である。精神病患者がおり、彼女の母親は精神分裂症を患っていた。さらに、彼女は父親の激しい暴力に晒されていた。第二に、クリスチャン・Rの誕生と幼少時の異常性である。クリスチャン・Rの父親はブリギッテの妊娠で彼女と別れ、クリスチャン・Rは生後8ヶ月で他所に預けられ、里帰りのたびに母親の愛と「憎しみ」(激しい折檻)の「悪循環」に晒される。この「母親との確執」と「養育家族・施設を転々とする継続的な人間関係のない環境から、彼には幼少の頃から攻撃性が現れていた」と分析される。第三に、クリスチャン・Rの心像にある否定的な父親像である。クリスチャン・Rは母から父親は「犯罪者」であり、「死んだ」と聞かされていた。精神鑑定では、この父親像が、「その血を受けた自分をも嫌悪」せしめ、「それが外国人嫌悪に転換した」と分析されている。

特に第二と三に分析された攻撃性と外国人蔑視が、ハウプトシューレ(15歳に編入)におけるクリスチャン・Rの態度に顕現した。すなわち、「新しい学校生活」における「攻撃的・極右的な言動」、「遅刻すると「難民が乗っているバスには乗れなかった」と理由を述べ、数学の難問には「外国人をひっぱたくこと」と回答する。」といったことが上げられている⁽²⁷⁾。

このように、第一に、家系上の異常性と、第二に、生育歴、といった、外から与えられた環境条件がクリスチャン・Rに攻撃性と他者＝外国人蔑視といういま一つの人格を刻印し、それが

クリスチャン・Rの青春の「ゆがみ」を形成した、と野中は捉えていた。それでは、クリスチャン・Rのこの人格がナチズムを捕えたのだろうか、それともナチズムが彼の人格を捕えたのだろうか。これについて野中も明確な叙述を用意していないが、両者の結びつきを否定するものはいない。私には、他ならぬ、これがテーマであるので、いまだ鑑定について詳しくみておきたい。

クリスチャン・エッガースの鑑定はクリスチャン・Rが外国人に対して攻撃する原因を解釈するものであった。以下では、先述の野中の紹介と一部重なるが、この解釈のプロセスを追ってみる。

母の精神病理

クリスチャン・Rの母ブリギッテの祖母は39歳で重度の変質病的・一幻覚的精神病(paranoid-halluzinatorische Psychose)を患い、被害妄想で自分の子どもたちを殺し自らも窓から飛び降り自殺を企てた。ブリギッテはその時10歳であった。彼女は母の精神病と突然の自殺に大変なショックをうけ、母親の発病の原因を自分自身にあると思ひこむようになった。母の死後、ブリギッテは父の肉体的な虐待に脅かされた。彼女は18歳になったとき、この虐待から逃れるために、クリスチャン・Rの父親となる男性と同棲する。しかし同棲関係も幸せなものではなかった。

その主たる理由はブリギッテのトラウマ性の幼児性にあり、18歳の彼女は自ら感情を抑圧し、心を閉ざし、感情の働き、苦悩、ショック、失望を伝える能力を欠いていた。さらにブリギッテが妊娠3ヶ月のときに、男性は傷害罪寸前の暴行を彼女に繰り返し加えていた。そして妊娠8ヶ月になったときに、関係は完全に破綻した⁽²⁹⁾。

クリスチャン・Rの少年院時代

生後8週間のクリスチャン・Rは母から離され、老養父母に1年半育てられ、その後再び母のもとで過ごす。15歳まで12の少年院を回る少年時代を過ごした。彼は少年院時代に精神的打撃(Traumatisierung)を繰り返し体験し、その結果人格錯乱(Persönlichkeitsstörung)に陥った。クリスチャン・Rの人格錯乱は重度の攻撃突発(Aggressionsdurchbruch)、衝動的行動、偏執的・懐疑的態度、ナルシスの行動傾向、感情認知の欠如の特徴をもっていた。クリスチャン・Rは、11歳の時点で、「俺が悲しいか或いは楽しいかどうか、あんたは気づかないだろう。俺は全く感情をもっていないのだからね!」と感情認知の欠如を自覚していた。

クリスチャン・Rの人格錯乱の特徴は、第一に、悲しいテーマについて笑いながら話したり、さらに第二に、思考は関連性と脈絡を欠き、拡散することである。第二の点についていまだ少し補足すると、彼は対象と関係のないモノローグを好み、テーマからいつも外れて、糸が切れたように突如話しが変わり、一つのテーマに専心することが困難であった。第一の点は、話=思考の展開で部分的に感情を抑制できない、奇怪なかつ極端に走ることと構造的に同一である。例えば、「午前と午後は共産主義の中で、夕方と夜に総統の中で」生活したい、その理由は、「夕方は美しいから、その時総統はそこに居て、俺の視界からはっきりと見えるからね、それに夜中に共産主義が出て、それを皆が夜中に見るのよ、ウーン、本物の共産主義なんてないな。それは願望にすぎないね…だから俺もそうさ、君主、王国について俺は何も評価しないね。全ては国王次第だからね。国王が富めば、貧民は貧しくなり、借金も膨れるよ。」といった具合であるが、この連想は非常に放縦で、「原子爆弾」にまでいってしまう。だが、彼はそれについて不安を感じていない。

その彼が放火犯罪を犯したことについても呼吸するかのように語り、それが終わらないうちに突如難民収容施設や外国人について話し出すのである⁽³⁰⁾。

父の像の消去

母ブリギッテはクリスチャン・Rに「お父さんはあなたの生れる前に死んでしまった」と言い聞かしていた。クリスチャン・Rにとって、父に対する一切の思い出は初めから徹底的に消し去られた。ところで父の像の完全な喪失は、精神分析学では、周知のように、その後の精神的な「荒廃」の原因（ラカン）および重度の発達障害の前提となる（グリーン）と解釈されている。もちろん、エッガースの精神分析もこの立場に立つが、ただしクリスチャン・Rについては父の像の喪失以上に母—子関係が重要な意味を有していたようである。ともあれクリスチャン・Rにおける父の像の喪失の意味をみておこう。

エッガースはクリスチャン・Rの人格像における「悪の、不快なファンタジー」が父との否定的な同一性によって形成されていた、と分析している。クリスチャン・Rは、「俺は父親に尋ねたいよ、母親が俺の父親を犯罪者だといったときに、父親はどんな感じをもつかっていうことをね」と自問した。クリスチャン・Rは、その一方で、理想的な父の像を求めている。彼はその求めを理想的国家に投影し、これをファンタジーの世界で作りあげた。そこで創り出された理想国家は、権力支配と迫害という権威的一破壊的特質を具えたものであった⁽³¹⁾。

母—子関係の崩壊

最近の発達研究と神経生理学の研究によると、母—子関係の発生は胎児（3ヶ月以上）の発するシグナルと母の身体との間の始源的・本源的な交渉にある、と報告されている。クリスチャン・Rと母ブリギッテの始源的・本源的な交渉はどうであったのか。予想されるように、ブリギッテは、自身がこの経験をもつことができなかったために、クリスチャン・Rのシグナルを感得し反応することができなかった。この場合に胎児のシグナルは無に帰するが、或いは歪んで反応され、誕生した子どもは「正当に存在しているという感情」（Gefühl des Richtig-Seins）を発展させることができなくなる⁽³²⁾。さらにクリスチャン・Rは生後8週間で母から引き離され、無価値な母の愛情に値しない存在という感情を宿命的な方法で強化された。

この関係崩壊は、児童期においても母の虐待のもとで継続され、クリスチャン・R自身の内面を「傷つき・傷つきやすさの中で仮死状態」（ハイデルベルク大学心理分析学者エンゲルハルト）にした。エッガースは、クリスチャン・Rの「俺は悪者さ、だから俺は叩かれる、それだから俺は苦しまなければならない」という自己像がここに起因しているとみている。彼は、母からの激しい体罰を自分自身が招いたものと考え、夜中泣き騒ぎ、そのためにまた折檻されたと思い込んでいた⁽³³⁾。

母—子関係の「鏡」=ペットの虐待

クリスチャン・Rは猫と兔を飼うが、それは母ブリギッテとの関係の「鏡」であった。まさしく母がクリスチャン・Rに親しく振る舞い、そして虐待した如くに、彼はペットを全く同じように扱った。最初彼はペットと一緒に戯れ、しきりに話しかけたが、その後は突き刺したり、首をねじったりする。

クリスチャン・Rはエッガースに猫と兔の殺害を話した。「俺はアレルギーをもっている、猫は俺を突然引っ掻きそして噛んだ、それでく、く、くびを折った」、兔は檻の格子から棒を入れて、突き刺した。クリスチャン・Rの話はさらに続いた。驚くことに、その後で発せられた言葉は放火の動機告白だった。

彼はトルコ人(近所のゲンチー家)子どもの「きゃきやと叫ぶ声」を非常に煩わしいと思っていた。「そうさ、やつらは俺を刺激して、俺は考えたね、やつらを今度処罰してやろうとね」。クリスチャン.Rは嫌悪すべき悪の自己を猫、免そしてトルコ人子どもに投影した、とエガースは分析している⁽³⁴⁾。

クリスチャン.Rの空虚な自我

ブリギッテはクリスチャン.Rの自我発達を可能にする母ではなくなっていた。彼が母によく問うたのは、彼女が彼の出生記録を偽造したことであった。「俺は、あんたが俺の母親だとは思っていない」というのが彼の言い分であった。この偽造はクリスチャン.Rに、自分が母の子どもではないという空想を根づかせ、クリスチャン.Rと母が「なんとなくむすびつけられていた」一つの背景をなしていた。その「なんとなく」という「満たされない期待」が二人の関係を際立たせている。

「満たされない期待」とは、クリスチャン.Rから見ると、母の「揺るぎない愛情への願望」であり、母にとっては「愛する、賢い息子への願望」であった。二人は互いの期待を過剰に要求しあい、そしてそこから失望が生じるという悪循環に陥った。母ブリギッテはクリスチャン.Rとの関係について、それは一種の「憎しみと一愛」だったとエガースに語った。

一方、クリスチャン.Rについて、エガースは、彼の生活史を貫く赤い糸があった、それは、母は自分を、攻撃的で破壊的になっても、あるがままに受け容れてくれるであろうという期待を抱いて、母との継続した信頼しうる関係を作り上げようと努力したことであった。

だが、現実招来された結果は、クリスチャン.Rの破壊的な行為が全て、一面では、彼自身がこれまで主観的かつ客観的に体験してきた、自己の存在を頻繁に、極端な形で、追いつめていくことを実演するものであった。しかし、他面では、彼の破壊的な空想、衝動は、欠落した母への思いと父の権威を求めるために、極端な形で挑戦を試みたことであった。この試みはもちろん挫折しなければならなかった。実は、この挫折こそが、破壊的な行動様式を際限なくエスカレートさせ、放火まで行き着く根拠となった。エガースはクリスチャン.Rとの対話分析を通じて以上が「明らかになった」と述べている⁽³⁵⁾。

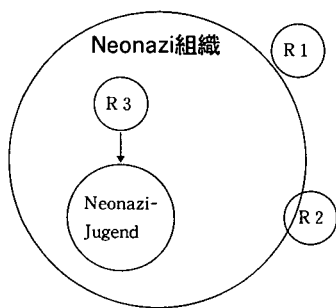
自己嫌悪と外国人嫌悪の相互関係

エガースは、クリスチャン.Rの精神分析から彼の否定的自我＝自己嫌悪が形成されるメカニズムを明らかにしたうえで、さらにこの自己嫌悪と外国人嫌悪の関係を説明している。エガースは、先ず第一に、自己嫌悪によって苦悩、狂気、悲しみ、失望、絶望の感情がひき起されるが、しかし弱い自我はこの感情を持続することはできず、第二に、容易に外へほとんどの場合、弱者、外国人に、まさしく弱さの故に一に投影される。その理由は、自己嫌悪は本来自己自身に向けられ、自己の価値喪失、自己嫌悪、苦悩、悲しみ絶望といった感情は持続されなくともよい、からである。要するに、この感情は外へ転じられ、かくして自己嫌悪は外国人嫌悪となる。エガースはこの両者の相関性を、1995年11月にハンス・ゲオルグ・ガダマーをハイデルベルクの自宅に訪ねたおりに、彼の教示で確認している⁽³⁶⁾。

第三に、クリスチャン.Rの破壊的な空想は自身の弱さと寄る辺なさから自己を護るための方略であった。だが、彼の場合にはこの空想を自己を国家指導者及び人類の懲罰者へと広げていった。彼は、エガースに一度、自分は「唯一の実行者」だと名乗った。その理由づけも、有名になってあらゆる新聞に載りたいおよびテレビに登場したいという願望—さらに「自分についての本が書かれる」と語っていたが、この空想—を現実へストレートに投影するものであった⁽³⁷⁾。

エガースは以上の三点より、クリスチャン・Rの否定的自我＝自己嫌悪が外国人嫌悪に向かうと同時に自己自身をその嫌悪された外国人を懲罰する「唯一の実行者」へ駆り立てた、と分析している。ここで、再び、否定的自我＝自己嫌悪→外国人嫌悪がなぜナチズムと結びつくのか、というあの疑問がでてくるであろう。この結びつきについては恐らく個人差が大きく、一般化はできないであろうが、しかし共通な要因を探り出す試みを回避してはならない。

まず、3の(4)で紹介したハッセルバッハの実践記録(『ネオナチ 若きリーダーの告白』)



に目を転じてみたい。ネオナチ組織の周辺には「欲求不満の思いを抱き、「将来に見通しも暗い」若者が多数いた(左図のR1, 2)。ネオナチはこの若者を「お前にも価値があるんだ」と受容することのできるおそらく唯一の存在であった。さらにネオナチ組織に足を踏み入れたスキンヘッズの若者R2のうち、「そうした評価を得られるがために」組織に「従属しきった」若者R3にとって、この組織は「絶対にやめられない、ある種の麻薬のような作用をした」。その若者は国家社会主義を学習し、その

イデオロギーによる結束に重きをおくネオナチ・ユエグントへと自己変革する。ただし、ここでも留意すべきは、ネオナチ・ユエグントと組織との関係は日常的なものではないということである。それは指導者原理にしたがっており指導者の下にネオナチ・ユエグントが散在している一、この指導者の命令でネオナチ・ユエグントは行動を起こすのである。

R3はクリスチャン・Rであり、メルン放火犯のクリスチャンゼンとペータースであった。この若者にとってヒトラーは同一化されるべき理想的他者であった⁽³⁸⁾。とりわけこの同一化は、思春期に、父親に内面的権威が欠如した場合に、自己の内面的権威を全く新たな一神聖で、一切を粉碎し、全世界を支配する一権威に対して向けられる。クリスチャン・Rの他に被告ガルトマンも「家庭内に父親像なくして育」っていた⁽³⁹⁾。さらに、後にみるネオナチ・ユエグントに共通してみられる心理的特徴も、思春期に父の権威に対する反抗と服従を体験せずに、しかも青年期に東ドイツの権威崩壊に直面していたことであった(後述4.(7)を参照)。

註

- (1) Information zur politischen Bildung, Nr. 237, 4. 1992, München, S. 16.
- (2) 熊谷徹前掲書15—24頁。「」内の文章も全て同頁からの引用である(以下同じ)。
- (3) 山本知佳子前掲書2頁、望田幸男前掲書8頁。
- (4) 山本知佳子前掲書4頁。
- (5) 望田幸男前掲書8頁。
- (6) 熊谷徹前掲書25頁。
- (7) 山本知佳子前掲書7頁。
- (8) Der Tagesspiegel, 24. 11. 1992.
- (9) Der Tagesspiegel, 28. 11. 1992.
- (10) Der Tagesspiegel, 1. 12. 1992.

- (11) Der Tagesspiegel, 2. 12. 1992. S. 1.
- (12) Tagesspiegel, 2. 12. 1992. S. 2.
- (13) Der Tagesspiegel, 3. 12. 1992. S. 1.
- (14) (15) Der Tagesspiegel, 3. 12. 1992. S. 2.
- (16) Der Tagesspiegel, 11. 6. 1993.
- (17) Tagesspiegel, 26. 5. 1993.
- (18) Der Tagesspiegel, 1. 6. 1993.
- (19) Der Tagesspiegel, 2. 6. 1993.
- (20) Der Tagesspiegel, 7. 6. 1993.
- (21) Der Tagesspiegel, 2. 6. 1993.
- (22) Der Tagesspiegel, 3. 6. 1993.
- (23) Der Tagesspiegel, 4. 6. 1993. S. 1.
- (24) Der Tagesspiegel, 4. 6. 1993. S. 2.
- (25) 山本知佳子前掲書29頁.
- (26) 野中恵子『トルコ人労働者移民放火殺人　ゾーリンゲンの悲劇』三一書房, 1996年.
- (27) 野中恵子前掲書281頁。尚、一部中略している。
- (28) 以上は野中恵子前掲書76—82頁の摘要である。
- (29) Christian Eggers, Selbstlosigkeit als Ursache für ausländerfeindliche Gewalt, in : Neue Sammlung. Vierteljahres-Zeitschrift für Erziehung und Gesellschaft, 36. Jahrgang/Heft2, April/Mai/Juni 1996, S. 246ff.
- (30) Christian Eggers, op. cit. , S. 248f.
- (31) Christian Eggers, op. cit. , S. 249.
- (32) Christian Eggers, op. cit. , S. 249. 力点は原文でイタリック体。
- (33) Christian Eggers, op. cit. , S. 250.
- (34) Christian Eggers, op. cit. , S. 252.
- (35) Christian Eggers, op. cit. , S. 253f.
- (36) Christian Eggers, op. cit. , S. 254.
- (37) Christian Eggers, op. cit. , S. 253.
- (38) E. H. エリクソン『洞察と責任』鍾幹八郎訳, 誠信書房, 1980年, 87頁。
- (39) 野中恵子前掲書59頁.

Die Kultur der Neonazi-Jugend im Modernen Deutschland (4)

Mitsuo MASUI*

RESÜME

Was ist die Ursache von der Entstehung der Neonazi-Jugend im Modernen Deutschland? Man versteht die folgenden drei Punkten als die Ursache davon : (1) die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels, (2) das Zusammenbrechende Familienleben, (3) die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts. Aber konnten wir die Entstehung der Neonazi-Jugend durch dieser drei Punkte entsprechend verstehen ? Ist es denn möglich, daß die zweckmäßlichen Täten, die den Antisemitismus, Großdeutschismus , und Gewalt anrichten, im psychologischen Vakuum und zwar ohne den starken Werken auf die Welt hervortreten? Das alltägliche Lebenswelt der Jugend im Wendel bringt uns das ganz anderen als das schon oben Verstandene.

[Inhaltsverzeichnis]

Einleitung

1. Die Möglichkeit des Verstehens der Kultur der Neonazi-Jugend
 2. Das alltägliche Lebenswelt der Jugend im Wendel
 - (1)Die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels
 - (2)Das zusammenbrechende Familienleben
 - (3)Die Alltäglichkeit der Gewalt in den Schulen
 - (4)Die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts *¹
 - (5)Praktik des <höchsten> Werts
 - (6)Orientierung der starken Weltanschauung *²
 3. Organisationen und Täten des Neonazis *³
 4. Alltäglichkeit einer Neonazi-Jugend *⁴
- Zusammenfassung

*1 Bull. Joetsu Univ. Educ. , Vol. 15, No. 1. 1995.

*2 Studies on History of Western Education, Vol. 24. 1995.

*3 Bull. Joetsu Univ. Educ. , Vol. 15, No. 2. 1996.

*4 Bull. Joetsu Univ. Educ. , Vol. 17, No. 2. 1997.